

## 新・小さな奇跡

作：大橋めぐみ / 小川政弘

演出：小川政弘

### 登場人物

早川理恵            高校 2 年生  
野中美紀            高校 2 年生。理恵と仲良し 3 人組  
太田素子            高校 2 年生。理恵と仲良し 3 人組  
理恵の母  
島田牧師  
田中のおじさん    クリスマス。70 歳ぐらい

### < 前編 >

理恵            「行ってきま〜〜す！」

( S E ) ドアが勢いよく閉まる。

理恵 N            登校するため、元気よく家を飛び出したわたしの名前は、早川理恵。どこにでもいる、普通の高校 2 年生。今朝のわたしは、何だかとっても気分がいいのだ。

理恵モノ          「う〜〜ん。そう快そう快。珍しく早く目が覚めたお陰で、朝ご飯もしっかり食べたし、髪形も決まった！」

犬                「ワンワン！」

理恵            「あ、チビ、おはよう。」

犬                「ワン！」

理恵モノ          「いつもは美紀と素子をバス停で待たせてばかりだけど、今日は余裕の「5 分前到着」。完ぺきだね。」

美紀            「あれー。理恵、早いじゃん。」

理恵 N            この子は野中美紀。仲良しの同級生だ。

素子 「ほんとー。新学期だからって余裕カマしても、3日と持たないよ、きっと。」

理恵N こちらは太田素子。彼女も同じクラス。3人とも中学から一緒に、”仲良し3人組”って感じた。

理恵 「おはよう。ちょっと君たち、言いすぎー。それよりさあ、お年玉で何か買った？あたし、超かわいいセーター買ったんだ！」

美紀 「あたし、靴買ったよ。」

理恵 「でもさ、学校は制服だし、着てくところないじゃん？せっかくだからさ、今度の日曜日にどっか行かない？」

美紀 「あ、賛成！」

理恵 「素子もいい？」

素子 「えー、あたし、全部定期預金に入れられちゃったよー。つまんない。」

美紀 「ま、ま、いいじゃん。で、どこ行く？」

理恵 「じゃ、お昼休みにいろいろ決めよ。」

田中 「理恵ちゃん、おはよう。」

理恵N 美紀や素子と一緒にバスを待ってたわたしに、声をかけてきたのは、散歩途中の田中さんという70歳ぐらいの老人だった。

理恵 (急に冷めて)「あ...おじさん。おはようございます。」

田中 「今朝は一段と寒いねえ。風邪なんか引いてないかい？」

理恵 「え、はい...。あ、バスが来た。じゃ、おじさん、また...。」

(SE)バスの音

バス内

美紀 理恵さあ、いつもあのおじさんと会うと、イヤそうな顔するじゃん。そのうちあいそが悪いって怒られるんじゃない？

素子 うん。何か露骨にイヤな顔するもんね、理恵。

理恵 いいのよ。あのおじさん、絶対に怒らないもん。田中さんっていうんだけどね。ほら、駅の真ん前のスーパーの裏にきれいな教会があるでしょ。田中さん、ずっと昔からその教会に行ってるらしいんだけど、あたしも小さいころ、親に教会学校行かされてたから、よくかわいがってもらってたみたいなんだ。でも、大きくなって教会やめてからも、特にこの2年ぐらい、子供あやすみみたいに声かけてくるから、何か最近ウザくって。そりゃ悪いかな、とは思う

けど、こっちが花の高校生になっても幼稚園の子供みたいに思われてちゃねえ。

素子 ふーん。いつも声かけてくんのは、それでかぁ。

理恵 そーそ。無視するわけにもいかないしさー。

理恵N こうして学校に向かったものの、正直言って、わたしは田中さんと顔を合わせるのが苦痛になっていた。バス停通りの散歩は日課らしく、決まって朝、顔を合わせるのだ。何で親せきでもないのに、あんなになれなれしく話しかけてくるんだろう。何か下心があるんだろうか。でもクリスチャンだから、エッチをしようなんて意図はなさそうだし…。

その日のお昼休み、日曜日にどこへ行くかいろいろ話し合った後で、結局、当日集まって、その日の気分で決めることにした。要するに、自分の買い物をお披露目できれば、どこでもよかったのだ。ところが、その日曜日になると…。

#### 待ち合わせ場所

( S E ) 雨、ざーざー降り

理恵 信じらんない。何で雨なのよー。せっかくのセーターのお披露目なのに…。おまけに寒～～い。

美紀 でも、ほんとにかわいいじゃん、それ。

理恵 サンキュー。大学生にナンパとかされないかなー。

素子 さすがに、美紀は例の靴下ろすの、やめたみたいね。

美紀 トーゼン。この雨だもん。一遍に泥んこになっちゃう。まあ、人は靴じゃなくて中身よね。

素子 セーターでもないよね。

理恵 ちょっと君たち、言いすぎー。

素子 昨日もラジオで言ってたんだけどさぁ、ある人の葉書きなんだけど、「わたしは美人に生まれなくて本当によかったと思います」って言うの。

理恵・美紀 何でえ？

素子 美人だとね、外見で一目ボレとかされちゃうじゃん？でも美人じゃないとね、自分を好きになってくれる人は絶対に中身を好きになってくれたって信じられるんだって。

美紀 へえー。何か悔し紛れにも聞こえるけど、一理あるよねえ。

理恵 でもさ、それって美人に失礼だよね。自分でいい顔選んで生まれてくるわけにはいかないんだしさ。

素子 あ、それもそっか。  
理恵 どっちにしろ、余計な心配だけどさ。  
3人 (笑い)  
美紀 ところで、どこ行く？  
素子 この天気だし、やっぱ映画かな。  
理恵 ...だね。でも、先にお昼食べて、2時からの回にしない？それまでちょっとデパートのアパレル売り場のぞいてさ。  
美紀 いいよ。  
素子 うん。  
理恵 じゃ、とりあえず新宿まで出よ。

理恵N あたしたち3人は、駅に向かって歩き始めた。

(SE)大通りの往来の音

田中 (少し遠くから)理恵ちゃん。理恵ちゃん。  
美紀 あ、理恵。ほら、あのおじさん。

理恵モノ あちゃー。よりによって、こんな時に会うなんて。

田中 こんにちは。お出かけかい？  
理恵 こんにちは。えっと...友達と新宿まで。  
田中 そうか。わたしは、これから教会の礼拝だ。今日は若い人たちがバンドで賛美歌を生演奏するんだ。どうだい理恵ちゃん。お友達と久しぶりに来てみないか。  
理恵 え...。あ、でも、また今度。じゃ急ぐんで。(2人に)行こ。  
美紀 あ、うん。  
田中 (少し向こうから)さよなら。またね。待ってるよ。  
素子 ちょ、ちょっと理恵。そんなに早足で行かなくても...。  
理恵 急いでるフリよ。  
素子 分かるけどさ。ほら、この先、信号赤だよ。  
理恵 歩道橋で行こ。  
美紀 ちょっと待ってよう。  
素子 あー、何でわざわざ階段なんだ？

(SE)強い風の音

美紀・素子 (口々に)うわっ！きゃー！  
美紀 すごい風。

理恵           あ、傘が！  
素子           理恵、危ない！  
理恵           わっ！きゃー！  
美紀・素子   理恵ー！

( S E ) 階段を落ちる音

理恵 N        風で飛ばされそうになった傘を追いかけてようとして、わたしは歩道橋のぬれた階段で足を滑らせ、下まで転がり落ちてしまった。

美紀           理恵！ 理恵！  
素子           理恵！どうしよう。  
田中           ( 向こうから走ってくる ) 理恵ちゃん！  
美紀           あ…。

理恵 N        一瞬、何が何だか分からなかった。体中が金縛りに遇ったようにこわばっていた。起き上がろうとして体を支えた右腕に激痛が走った。その時、声をかけたのは、今逃げ出してきたはずの田中さんだった。

田中           大丈夫かい？  
素子           あの…。  
田中           だれか、携帯電話は持っているかい？  
美紀・素子   いいえ。  
田中           そうか。では、そこの教会で電話を借りて救急車を呼ぶから、あまり動かさんようにな。  
美紀・素子   あ、はい。

( S E ) 救急車のサイレン

理恵 N        田中さんは、救急車が来るまでの20分近く、わたしのそばにいて、励まし続けたり、痛むところをさすってくれていた。もう礼拝は始まっているのに。

田中           理恵ちゃん、大丈夫だ。神様が付いてる。イエス様がきっと守ってくれるからね。

理恵 N        その声を後に、わたしは病院に向かった。落ちた時のショックが収まると、急に体中に痛みが押し寄せてきた。でもなぜか不思議に、心の中は落ち着い

ていた。田中さんが言った「イエス様が守ってくれる」という言葉が、何か遠い昔に眠っていたわたしの魂を呼び覚ましたように、心の中にこだましていた。

< 後編 >

病室

看護婦　それでは、後で入院受付までいらしてください。

母　ありがとうございました。

( S E ) ドアの閉まる音

母　(ため息)

理恵　...お母さん。

母　あ、理恵ちゃん、起きてたの？どう？痛くない？

理恵　うん...

母　落ち方がよくて、頭は大丈夫って先生も言ってくださったんだけど...

理恵　骨、折れたの？

母　あちこち打撲だらけだけど、落ちたのは腕だけだったんですって。安心したわ。田中さんから電話もらった時は、どうなることかと思ったけど。

理恵　あ、田中さんが...

理恵モノ　そうだ。あたし、田中さんを避けようとして、わざわざ歩道橋を渡ったんだった。

母　そうよ。田中さんが救急車も呼んでくださったのよ。後でよくお礼を言っておきなさいね。

理恵モノ　ウソ...。何か、妙なことになっちゃったな。あたしが田中さんを避けたの、きっとバレバレなのに...。どんな顔してお礼なんて言えばいいのよ。

( S E ) ドアが静かに開く音

母　はい。

美紀　あのぉ。

理恵　美紀。素子。

素子　大丈夫？理恵。

理恵　うん。ごめんね、映画行けなくて。

母 本当にごめんなさいね。ご迷惑をおかけして。  
素子 あ、いいえ。  
母 じゃ理恵ちゃん。お母さん、一度帰って着替え用意してくるから。  
理恵 うん。  
(SE) ドアの音  
美紀 大変だったね。  
理恵 まあね。  
美紀 でも、あれはやっぱ、理恵が悪いと思うよ。  
理恵 わたしが？  
素子 そうだよ。あんな強い雨と風の中で、急いで歩道橋を渡ろうとするんだもん。  
何も悪いことしないあのおじさんから、田中さんて言ったっけ？ 邪険に逃げたりするから、バチが当たったんだよ。  
  
理恵モノ バチ？  
  
理恵N グサッと来た。人を見舞いに来て、よくこんなことを平気で言える。やっぱり美紀や素子は、わたしのケガなんか他人事なんだ、とすごく腹が立ったし、スーっと心に冷たい風が吹いた。でも、あの時、田中さんの励ましを聞いて不思議に力づけられたことを思うと、何だか本当に悪いことをしたという後ろめたい思いもあった。  
次の日、意外な人がわたしの病室を訪れた。

## 病室

(SE) ドアノック、開閉  
島田牧師 早川理恵さん、ですか？  
理恵 そうです...けど？  
島田牧師 理恵ちゃん、すっかり大きくなって。わたしが分かるかな？  
理恵 さあ...  
島田 牧師の島田です。ほら、理恵ちゃんが幼稚園のころは、まだ神学生で、教会学校の幼稚科を受け持ってましたよ。  
  
理恵N わたしはまじまじとその人の顔を見詰めた。それは確かに、田中さんが通っている教会の牧師さんで、小さいころかわいがってくれた島田先生だった。  
  
理恵 島田、先生？

島田 思い出してくれた？いや、この度は大変だったね。でも、大事には至らずに本当によかった。田中さんに頼まれて、お母さんに連絡してお聞きしたんだ。

理恵 田中さんに？あの時はわたし、田中さんに悪いことしてしまって。治って今度会ったら謝ろうと思ってたんですけど。あの日はわたしのせいで、礼拝にも出られなかったでしょうし。

島田 実はね、理恵ちゃん。田中さんは今、この病院に入院しているんだよ。

理恵 入院？！

島田 うん。あの日、一刻も早く救急車をとったんだろう。土砂降りの中を傘もほうり出して教会に電話しに来たもんだから、すっかりぬれてしまってね。あのお年だろう、肺炎を起こしてしまった。そしたら持病の糖尿の方も悪くなってしまって、今、集中治療室だけど、今日辺りがちょっと危ないんだ。

理恵N 驚いて声も出なかった。

理恵 だって、あんなに元気そうに、毎日散歩してたのに。

島田 うん、あれも糖尿の治療の一つだったんだ。

理恵モノ どうしよう。もし、万一のことがあったら、わたしは、わたしは…。おじさん、頑張って、死なないで！

島田 その田中さんがね、集中治療室に移される前、理恵ちゃんに手紙を書いて、「これを届けて」ってわたしに託したんだ。さあ、これがその手紙だ。

理恵N わたしは急いで封を切って、田中さんが苦しい中から書いたらしい、乱れた字の手紙を読んだ。

理恵 理恵ちゃん、傷はどうですか？痛むでしょう？でも、大丈夫です。イエス様と一緒にだからね。（途中から田中の声に）理恵ちゃんは、どうしておじさんがいつも声を掛けるのか、不思議に思ってたでしょう。いいえ、そんなおじさんを嫌がってるのも知ってました。その訳を書きます。理恵ちゃんは、幼稚園の時、教会学校に通ってたよね。その時、仲良しのお友達で、田中明日香って子がいたのを覚えてますか？

理恵モノ 田中明日香？そう言えば…

理恵N 不意に遠い日の記憶がよみがえってきた。その子は大の仲良しで、確か小学



校に入ったころ、お父さんの転勤で、引っ越していったっけ。結局それっきりで、わたしの記憶からは、ほとんど消えていた。

田中 その子はおじさんのたった一人の孫だったのです。「だった」と言ったのは、明日香は中3の時に、急性白血病でなくなったのです。理恵ちゃんと同じで教会からはずっと離れていたんだけど、病気になってから、「おじいちゃんや両親が行く天国に自分も行きたい」と言って、イエス様を信じたのです。そしたら、小さいころの楽しかった教会学校のことを思い出したらしくて、「もし理恵ちゃんに会えたら、ぜひイエス様のことを伝えてほしい」とってわたしに頼んだのです。これで、わたしが理恵ちゃんに“しつこく”声を掛ける訳が分かってもらえたと思います。

理恵モノ 明日香...

理恵N 不意に涙が込み上げてきた。悲しさと、懐かしさと、おじさんへのすまなさと、みんな一緒になって、ふいてもふいても涙は止まらなかった。

田中 明日香は、亡くなるまで、理恵ちゃんがイエス様を信じられるように、祈ってました。おじさんも祈っています。イエス様は、理恵ちゃんの痛みを全部知っています。体だけでなく、心のつらさもね。そして、それを進んで自分の身に負ってくれます。おじさんも、どうなるか分からないけれど、全部イエス様にお任せしてるから、何も心配してません。理恵ちゃんも、イエス様の慰めと力によって、一日も早く回復するように、祈ってるからね。

理恵N その日から、わたしの中で何かが変わった。それが何なのか、まだ自分でもよく分からない。でも確かに言えるのは、“自分は一人ではない”という心の深いところの確信みたいなものだ。田中さんは、医者が奇跡だと言う回復を見せて、2週後に退院し自宅療養することになった。その日、わたしは自分から田中さんの病室を訪れて、「治ったら教会に行きます」と宣言して、おじさんを喜ばせ、おまけに「おじさんがすっかりよくなるように」とその場で祈ったのだ。奇跡と言うなら、これもイエス様がくれた、小さな奇跡かもしれない。

< 完 >